様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ０３２６６

研究課題名（和文）現代社会における青年から大人への移行過程の解明：縦断調査による発達的変化の検討

研究課題名（英文）Elucidation of the transition process from adolescents to adults in modern society: Examination of developmental changes by longitudinal survey

研究代表者
都筑　学（Tsuzuki, Manabu）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：９０１４９４７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、大学3年生から社会人1年目までを対象に、4回の縦断調査を実施し、青年が社会に出ていくプロセスにおいて、どのような時間的展望を持っているのかについて検討した。それに加えて、19～22歳の大学1年生から4年生、並びに社会人（学生以外の青年）を対象にして、時間的展望やアイデンティティなどの質問項目にもとづく横断調査をおこない、縦断調査の結果と比較検討した。さらに、16～18歳の社会人（学生以外の青年）を対象とした横断調査も実施した。以上のような複数の調査を実施し、学生や社会人の意識を比較検討することを通じて、青年期における大人への発達に関する基本的な傾向を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題では、縦断調査と横断調査を組み合わせることによって、16歳から22歳までの青年期における時間的展望や自己意識の発達について明らかにすることができた。このような複数の視点にもとづいて、10代後半から20代前半にかけての発達を検討した研究は皆無であり、その点で、本研究は発達心理学に対して新たな知見を付け加えたものであり、そのことの意義は大きいと言える。

研究成果の概要（英文）： In this research project, we conducted four times of longitudinal surveys from the third year of university to the first year of working adults. In addition, we conducted a cross-sectional survey based on questions such as time perspective and identity for 1st to 4th grade students aged 19 to 22 and working adults (young people other than students).In addition, a cross-sectional survey was conducted targeting working adults aged 16 to 18 years. By conducting multiple surveys as described above and comparing the consciousness of students and working people, we were able to clarify the basic trends regarding adult development in adolescence.

研究分野：発達心理学

キーワード：時間的展望　縦断調査　横断調査　大学生　アイデンティティ　自己意識

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

青年期の発達研究が取り組むべき根本的な研究課題の一つは，青年が社会の中でいかに大人へと発達していくかを明らかにすることである。

大学生は、大学から社会への移行期であり、進路選択に伴って、自らのアイデンティティを模索しながら確立していくことが重要な発達的な課題となる。

大学生の進路選択は、小中高校と積み重ねてきた進路選択の上に成り立つ「最後の進路選択」であり、青年の人生に与える影響は大きいといえる。

２．研究の目的

都筑（2007）は、1994～1996 年度に入学した 3 コホートの大学生のべ 514 人を対象に、1997～1999 年に 3 回の縦断調査を実施し、進路選択と時間的展望との関係を検討した。そして、希望進路が定まっていく過程、進路選択の準備活動と進路決定との関係、進路決定の有無が時間的展望に及ぼす影響などに関する知見を明らかにした。

他方で、縦断データ数の少なさ（各コホート 37、50、73 人）や調査時期の特殊性（「失われた 10 年」と呼ばれるようになった就職氷河期の真っただ中での調査）という問題点が含まれていた。

そこで、大学 3 年生の秋から大学卒業後の春までの時期に焦点化した調査を実施し、大学生の進路選択に伴う意識変化について明らかにすることを目的とした。

それに加えて、3 つの異なる年齢集団を対象とした横断調査（大学 1～4 年生、19～22 歳の社会人、16～18 歳の社会人）を実施し、大学 3 年生から社会人 1 年目までの縦断調査で得られたデータの特徴を検討する。

３．研究の方法

３．研究の方法

(1)調査内容

目標意識尺度、EPSI、生活感情、日常的生活スキル、生活満足度、ISRI、DIDS、自尊心、進路希望・進路決定（縦断調査のみ）

(2)調査時期と調査対象者

①縦断調査　第 1 回（2019 年 11 月）861 人、第 2 回（2020 年 5 月）303 人、第 3 回（2020 年 11 月）226 人、第 4 回（2021 年 5 月）189 人。

②横断調査 1（2020 年 11 月）大学 1～4 年生 998 人、

③横断調査 2（2020 年 11 月）19～22 歳の社会人 854 人、

④横断調査 3（2022 年 1 月）16～18 歳の社会人 227 人。

(3)調査実施方法　インターネットリサーチ会社（イデアラボ）に調査を委託した。

４．研究成果

(1)内定の有無と時間的展望・アイデンティティとの関係　内定のあり・なし 2 群における目標意識尺度と EPSI の下位尺度の得点を表 1 に示しておいた。上段は第 1 回調査の結果であり、下段は第 2 回調査の結果である。

表 1　内定あり・なし群における目標意識尺度・EPSI の平均値と SD

		希望	目標有無	時間管理	計画性	目標渇望	空虚感	EPSI混乱	EPSI統合
内定なし	M	2.59	2.82	2.82	2.74	3.67	3.31	3.15	2.91
	SD	0.77	0.92	0.97	0.94	0.86	0.71	0.78	0.91
内定あり	M	3.00	3.22	3.32	2.72	3.82	3.24	2.96	3.27
	SD	0.62	0.80	0.77	0.82	0.65	0.68	0.68	0.86
内定なし	M	2.62	2.89	2.96	2.74	3.73	3.28	3.07	3.02
	SD	0.76	0.92	0.99	0.90	0.85	0.82	0.91	0.93
内定あり	M	3.06	3.38	3.30	2.76	3.76	3.12	2.86	3.49
	SD	0.61	0.75	0.88	0.77	0.64	0.71	0.81	0.80

（注）上段:第 1 回調査、下段：第 2 回調査

内定あり・なし群および 2 回の調査時期の間に有意な差が見られるかどうかを検討するために、2 要因の分散分析をおこなった。
その結果、将来への希望（F(1,176)= 17.46，p<.01)、将来目標の有無（F(1,181)= 14.20，p<.01)、時間管理（F(1,181)=14.47，p<.01)、EPSI 統合(F(1,174)=14.47，p<.01)において、有意な群の主効果が見られた。さらに、将来目標の有無（F(1,181)=5.54，p<.05)と EPSI 統合(F(1,174)=2.18，p<.05)において、調査時期の主効果が有意であった。いずれも、交互作用は有意ではなかった。また、計画性、将来目標の渇望、空虚感、EPSI 混乱においては、有意な主効果や交互作用は認められなかった。
内定者と未内定者との間には、大学 3 年生の時点で、将来への希望・将来目標の有無・時間管理の得点に既に差があることがわかった。そのことが、就職活動を進める際に肯定的に作用の統合にもつながっていくのではないかと考えられる。

(2)潜在変化モデルによる時間的展望とアイデンティティの関連の分析

縦断調査の第 1 回と第 2 回のデータを用いて、潜在変化モデルによる分析をおこなった。表 2 に示したのは、目標意識尺度と EPSI の下位尺度における level と change の分散と適合度指標である。表２より、将来目標の有無、EPSI 混乱、EPSI 統合で level と change の分散が有意であることが明らかである。

表 2　潜在変化モデルによる level と change の分散と適合度指標

	level	change	CFI	TLI	RMSEA
将来への希望	0. 531	0. 033	0. 725	0. 685	0. 129
将来目標の有無	0. 603*	0. 095*	0. 991	0. 987	0. 040
計画性	0. 091	0. 017*	0. 932	0. 901	0. 094
時間管理	0. 330	0. 055	1. 000	1. 000	0. 000
将来目標の渇望	0. 193	0. 086	0. 952	0. 931	0. 064
空虚感	0. 043	0. 028*	0. 931	0. 900	0. 070
EPSI混乱	0. 116*	0. 038*	0. 978	0. 971	0. 037
EPSI統合	0. 379*	0. 079*	0. 965	0. 949	0. 065

（注）* p<.05

次に、将来目標の有無と EPSI 統合の変化の関係を検討するために図 1 に示したような潜在変化モデルにもとづく分析をおこなった。その結果、十分な適合度が得られ（CFI=0.950, TIL=0.941,RMSEA=0.058)、EPSI 統合（change2）と将来目標の有無（change1）の変化の間の共分散が有意だった。

そこで、将来目標の有無の Z 得点を 3 等分し、低下群 ●-●　n=98（1.00→0.66)、上昇群 A▲-▲　n=98（0.14→0,27)、上昇群 B■-■ n=99 （-1.13→ -0.95）となった。この 3 群における EPSI 統合の変化の様子を示したのが図 2 である。将来目標の有無の 2 つの上昇群は、いずれも EPSI 統合の z 得点が上昇していた。それに対して、低下群は、EPSI 統合の得点が低下していた。この結果から、将来目標を獲得することで、アイデンティティが達成されていくが明らかになった。

＜引用文献＞

都筑学、大学生の進路選択と時間的展望、ナカニシヤ出版、2007

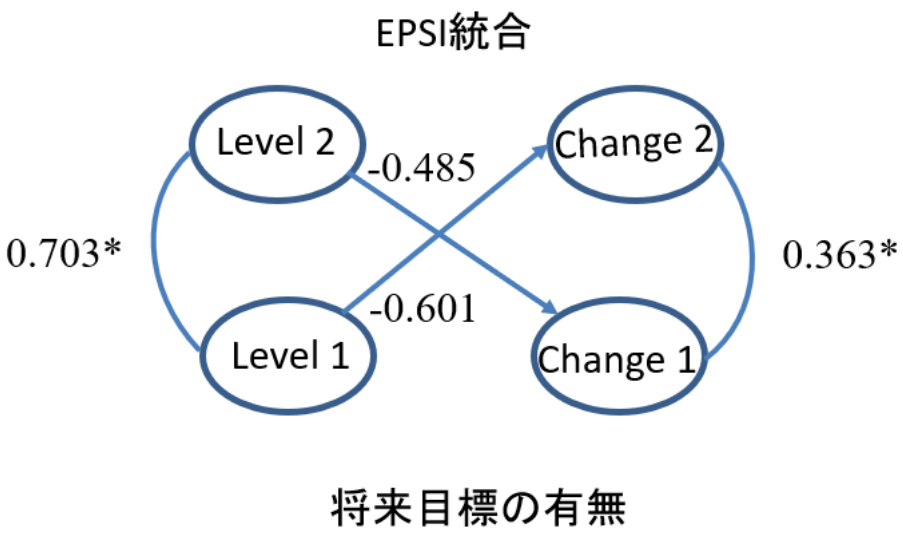

図１　と将来目標の有無と EPSI 統合における潜在変化モデルによる分析結果

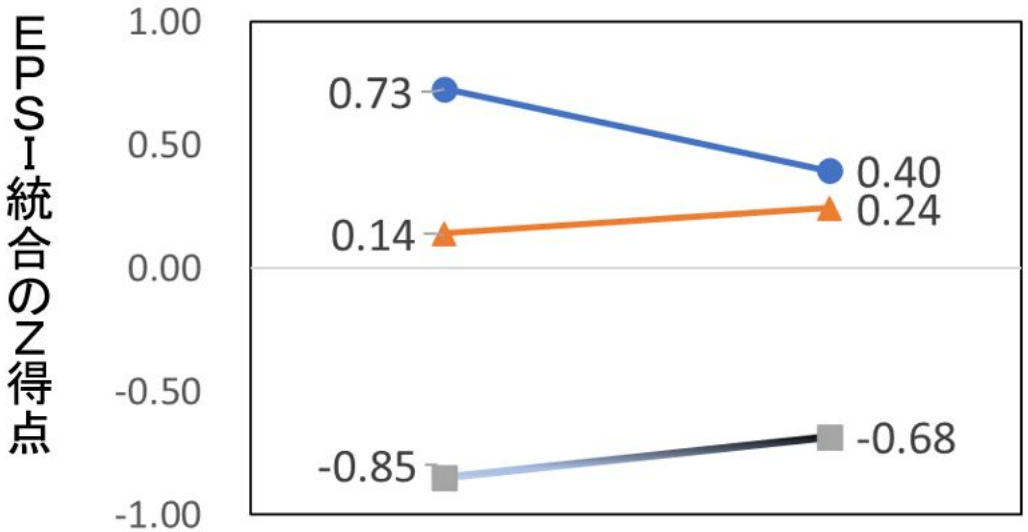

図２　潜在変化モデルにもとづく将来目標と EPSI 統合の変化の関係

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 都筑学
２．発表標題 大学生の進路選択と時間的展望 －2019～2020年の縦断調査にもとづく検討－
３．学会等名 日本青年心理学会第28回大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関